



令和 元年 11 月 1 日 発行 第 26 号

目 次

巻頭言

にわかファン

寺池 尚孝 …… 1

陶芸家のひとりごと

器と料理と育成の話

清水 大介 …… 2

陶芸道中いざ凝り気

私の楽しいこと

的野 寿代 …… 4

私の作品自慢

大物作り

稲垣 薫 …… 5

陶芸技術ノート

テーブルコーディネートと

京都のうつわ

湯浅 靖代 …… 8

展覧会見聞録

ボストンで感じた事

今井 眞正 …… 10

活動報告

… 13

会員便り

… 14

編集後記

… 15

付録 展覧会情報掲載申請書 …… 16

編集委員会

委員長 今井 眞正

委員 寺池 尚孝 谷口 良孝

片岡 俊彦 増田 淳三

巻頭言

にわかファン

会長 寺池 尚孝

日本で開催されていたラグビーW杯も、無事盛況のうちに閉幕しました。経済効果は約 4000 億円以上だとか。海外から多くの方が来日、長期滞在されている熱心なファンは、試合の合間に日本各地の様々な都市を観光されたようです。また、ファンの方々が消費するために、ビールがなくなる店が出てきたりして、普通では考えられないこともたくさん起こりました。

海外だけでなく、日本のラグビーファンの活動も活発で、学生時代ラグビー部であった私の友人は、チケットをあらゆる手段を講じて手に入れ、各試合を転戦、同日開催の試合もあるため、結局 20 数試合を観戦したとか。そのために仕事も休み、2、3 百万円もの費用を費やしたようです。

4 年に 1 回の大会ではない。日本開催でこれだけ最高の試合を観られるチャンスは、一生に一度だから。友人からそう聞いたとき、『一生残る一瞬のために』というベ이스ターズのスローガンを思い出しました。その感動を味わいに、彼らはスタジアムに足を運んでいるのでしょうか……。

奇しくも、9 月 28 日横浜スタジアムで阪神に惨敗した遠征から帰京する私の目に飛び込んできたのは、スポーツバーで阪神ファンとベ이스ターズファンがともにアイルランド戦を観ながら日本を応援する姿でした。待ち合わせがあったので、その輪に加わることはできなかったのですが、気になって仕方なく電車の中でも速報を眺めていました。車内もザワザワとした様子でした。友人と合流した時には「日本勝ったね！」が挨拶がわりとなりました。

ラグビーにこれだけ興味が湧いたのは、前回 3 勝しながら決勝トーナメントに行けなかった、あの W 杯以来です。あの時は、五郎丸選手のポーズを真似する人が続出、大ブームがきましたが、その人気もラグビー人気の底上げにはつながらず、1 年ほどでにわかファンは去ってしまいました。

今回のW杯では、前回は上回る結果を示し、日本国内のラグビー熱は比べものにならないものがあると思います。

私も、ラグビーを見る機会がまだ多い方の、にわかファンですが、やはりここ数年は、現地に観に行くことも無く、野球一筋で過ごしてきました。国際戦は勝利が大切ですが、その他の試合や他の時間では、啓蒙活動や私のようなにわかファンがまた観たいと思う環境づくりが大切なのかなと思います。

先日、ベ이스ターズのスタッフの方の講演会に参加しましたが、勝てばお客さんが来るという考えを改め、ターゲットを絞り、お客様の目線に立って、また来たいと思って楽しんでもらえる環境づくりが大切だと気付かされたとおっしゃっていました。閑古鳥が鳴いていた横浜スタジアムは、今では日本で1番チケットの取りにくい、稼働率ナンバーワンの球場になりました。私も年間20試合近くここで観戦していますが、負けた試合でもがっかりだけでなく、楽しかったと思える要素があり、また行きたいなと思いながら帰宅しています。にわかファンの心も十分捕まえる仕掛けが方々に散りばめられています。

陶芸に関しては、昔は多くの人が趣味としてやってみたいと思っておられ、人気もありましたが、普及活動を怠り、またやってみたいと思わせることができなかったこともあり、陶芸教室の閉鎖が相次ぎ、陶芸人口も減って来ています。

今回の朝ドラ『スカーレット』では陶芸を取り上げています。それが起爆剤になり、陶芸を体験したいという人が増えるかもしれません。これを機会に、多くの方々が陶芸に親しみ、末永く作陶をつづけて行かれるように願っています。我々の「京都・やきもの倶楽部」もそのような活躍の場としてお役に立てることが出来ればと考えています。作品を作り発表する会、皆で仲良く楽しめる会、作家との交流で色々学べる会、その他、会に対して思うところがおありだと思います。決して、活動が負担に感じる事があってはいけないと思います、会を楽しんでいただけるよう色々考えておりますが、思うところいつでもご意見ご提案頂ければ嬉しく思います。

陶芸家のひとりごと

器と料理と育成の話

陶芸家 / 経営者 清水 大介

はじめまして。京都の清水焼団地で陶芸をしている清水大介です。さて、同じ町内でいつも何かとお世話になっている先輩の谷口良孝さんからご依頼をいただいてこの原稿を書いております。恥ずかしながらこの会報を読んだことがなく、全く情報がないので、もしかすると趣旨と合わないことを書いているかもしれませんが、その場合はぜひ別の方の原稿に差し替えられていることを切に願っております。

ということで、とりあえずは掲載していただく前提で書きます。はじめに、ほとんどの方が僕のことを知らないと思いますので、自己紹介をしたいと思います。名前は清水大介です。キヨミズダイスケと読みます。シミズではなくキヨミズです。焼き物の会報なので、ご存知の方もおられるかもしれませんが、京都には清水六兵衛という代々焼き物を仕事にしている家がありまして、僕はその分家として生まれました。正確にいうと、五代目清水六兵衛のひ孫です。こういうことを書くと、さぞ由緒ある感じで生まれ育ったように思われることが多いのですが、事实は全くもってそんなことはなく、何のしがらみもなく自由奔放に生きてきております。現在は、清水焼団地で陶芸をしています。清水焼団地にもたまたま流れ着いた感じで、もともとは全く何の接点もありませんでした。今は、「清水焼団地で清水焼をやっている清水さん」ということで、面白がられたりしています。

さて、では名前の次に、自分のこれまでの活動の流れについてもダイジェストで書きますね。小学校から高校まではサッカー漬けの毎日でしたが、大学でたまたま建築を学んだことで親の仕事である陶芸に興味を持ち、大学を卒業した後に、陶芸の専門学校、通称「訓練校」に行きます。その後、猪飼祐一先生のところで3年間内弟子として勉強させていただきました。その後、実家のガレージを

作業場に改装し、独立します。それから2年後に清水焼団地に工房を移します。その場所で「トキノハ」という名前の陶器のお店をやりだしたことで、人生がいろいろと思っていた感じとは違う風になっていきました。4年後には実家をカフェにしたり、その2年後には株式会社を設立して代表取締役になったりと、最早僕はいわゆる陶芸家ではなくなってしまっている感じがしています。この会報も「陶芸家のひとりごと」という風を書いてあったので、僕で大丈夫なのかな？と思ったりしながら書いています。

僕がつくっているものは、陶芸の作品ではなく、使うための器です。鑑賞するためのものではなく、料理が盛られて完成するような、そんな器をつくっています。いわゆる食器です。「器」か「作品」か、この違いってなんだと思いますか？色々な考え方がありますが、僕は、「作品はそれ単体で成立するもの、器は何か盛られて完成するもの」だと思っています。もちろん、ここからが器、ここからは作品、と明確に分かれているわけではなくて、その両者の間にはグラデーションの領域があるのですが、僕は器と作品をそういう風に分けています。

オブジェのように、もともと使うことを前提としていないものは作品として分かりやすいのですが、器の形状をしている作品というのは、作品と器との領域がほんとに微妙です。また、この境界線を意識して仕事をしている人と、ぼんやりしている人というの也有います。使い手目線からすると、この器は料理を盛って欲しいと思って作っているのかな？それとも飾って欲しいと思って作っているのかな？という疑問をもつというのを、料理人さんなどからもたまに聞いたりします。

ちょっと話が飛びますが、京都では和食がユネスコ世界文化遺産に登録されたとのことで、清水焼と和食とを積極的に結びつけようという動きが多く見られます。行政からもそういう動きがありますし、組合などでもよくあります。これに関して言えば、もちろん京料理と清水焼は昔から深い繋がりがあり、そこが改めてより深く繋がるのはとても意義があることなのですが、実は、洋食の世界でも今、和食器に対するニーズがめっちゃくちゃ高くなっています。和食と違い、洋食はもともとあまり器に対しての知識がない分、今その方

達はかなり熱心に器を探しているという話をよく聞きます。でも、京都には洋食、いわゆるフランス料理とかイタリア料理など、イノベティブと呼ばれるジャンルの料理に対応する器がない、と言い、みんな有田や瀬戸に買いに行かれます。東京のレストランの方も、京都を飛び越えて、有田まで行きます。海外の方も、有田に買いに行きます。とっても残念です。

清水焼も洋食の器をつくることのできるのに、みんなが和食にフォーカスすることで洋食ががっぽり抜け落ちています。個人的にはそこで仕事をたくさんもらっているの、ありがたい思いもあるのですが、個人では有田のように「面」で勝負してくるところに太刀打ちできません。ちなみに、世界のベストレストラン 50 というランキングが毎年発表されるのですが、その少し小さな規模でアジアベストレストラン 50 というのも毎年ランキングが発表されます。現段階ではまだ噂ですが、2020年の表彰式が日本で開催されるという話があり、それが東京ではなく「有田」で開催されるという話もあります。表彰式に有田を訪れたついでにアジアのスターシェフに有田の器も見てもらおうということなのですが、すごいですよね。有田の熱意を感じます。ちなみに、おそらく清水焼の業界では、ミシュランは知っていても、アジアベストレストランというランキングをそもそも知っている人はほとんどいないと思います。

京都というのは、昔からのお付き合いのなかで仕事が回ったりすることが多く、「京都のなかでグルグルお金が回っている」なんて話もよく聞きます。それは京都の大切な部分で、それ自体を否定するつもりはないのですが、なまじそれで食べちゃうせいで、積極的に外貨を獲得していこう！という気概をもつ人が出にくいのかな？とも思ったりすることもあります。これを書いている今日、タイルを施工する会社を経営されている方と一緒にいたのですが、その方が、「おれな、今年中に今まで貯めたお金全部使ったろうと思ってんねん。若手の職人を育てる施設とかつくったりして。んで、有り金ゼロにしてからもう一回ゼロから仕事とったろうと思ってんねん。」というようなことを言っていて、僕はその人のことをよく知っているので、それがはったりではなく、本気で言ってい

るのがわかるのですが、まあイカレた人だなと思いつつも、なんてかつこいいのだとも思いました。私財をゼロにしても、業界のために若手を育成させようというようなことをされている方を、少なくとも僕は京都の陶芸界では聞いたことがありません。もしかしたら僕が不勉強なのかもしれませんが……。そんな人といっしょにしていると、自分が儲けるために仕事をするのがあほらしくなるというか、すごいな〜と尊敬します。僕も来年には40になります。自分が有名になるためでなく、誰かのためになるようなことを必ずしたいと思います。実現するまではきれいごとなのですが、実は少し構想もありまして、また京都の陶芸界で変なやつがおるな〜くらいに思ってもらえるように頑張ります。

思うままに書いたものでこれぞまさに「ひとりごと」ですね。書き出してから1時間でここまで来られました。読み返さずに提出します。実は締め切りを大幅にオーバーしているのも、もしかするとお蔵入りになるかもです。しかし、書いていて僕自身も気持ち良かったです。話が飛び飛びで本当に申し訳ございません。またどこかでお会いすることがあればお叱りください。最後までお読みいただき、ありがとうございました。



奥さんと。工房にて。

陶芸道中いざ凝り気

私の楽しいこと

会員 的野 寿代

やきものにこだわりがあるかと言えば無いのだが、あらゆる一品に出会うと楽しくてワクワク感に満ち溢れ、幸せ度100パーセントになる。その思いが自然とあふれ出てきて、土と遊んでいるような気がする。

今年、静嘉堂文庫美術館で、三菱四代岩崎小弥太が妻孝子に贈ったお雛様、そして妻から還暦を迎える夫に贈った七福神と童子たち、総勢58点の御所人形に出会えた。生き生きとお品の良い何とも言えない可愛らしさに包まれて、大、大、大満足であった。お雛様とお道具は、戦後散逸してしまったが、偶然この内裏雛と出会った人形愛好家、桐村喜世美氏によってほとんどが再び参集され、昨年、元々の岩崎家ゆかりの静嘉堂文庫に寄贈されたのであった。コレクターとして凄い方だと、またそこで感激をした次第である。

そして、卯年生まれの還暦の小弥太に合わせ、兎の冠を被ったお人形達の鯛車曳、楽隊、宝船曳、輿の行列、餅つきの5グループの壮観なこと。布袋様を小弥太に、弁財天を孝子に見立て、表情豊かにお祭りの賑やかさ。ワクワク感がとまらなかった。

昭和14年に催された還暦祝賀会の写真もあり、男性の来賓21名が夫妻を囲み、御祝膳を前にして、長いダイニングテーブルに着席され、なんとその中央にこのお人形の一群が列をなしている。粗相でもしたら大変に思うが、そこはさすが岩崎家なのであろう。並ではない。そして、来賓それぞれにリバーシブルの「ちゃんちゃんこ」と「頭巾」が配られ、食堂では桃色、野外では赤色を表に着用して記念撮影されている。カラー写真でないのが残念だが、今時のスポーツ観戦定番のお揃いのユニフォームのようで、皆に一体感溢れ、いかに小弥太に喜んでもらうために、みんなで共に楽しむかということを、楽しみながら考えられた

のであろう。ありとあらゆる感性がくすぐられてしまった。

また、数年前、ある初釜に普段では味わえない幸せな体験をさせていただいた。

大寄せではあるが、お濃茶にご亭主秘蔵の光悦のお茶碗が主茶碗として使われ、20人近い全員にそのお茶碗が拝見にまわされたのだ。びっくりするやら、緊張するやら覚えていない気もするが、両手にしっかりと包み込ませていただいた。

現代陶芸の逸品と取り合わされ、生気に溢れた光悦のお茶碗は瑞々しく、最高の年明けとなったのだが、よく考えてみると、お茶碗としてではなく、光悦その人と向き合っていることとなり、加えて何代もの人々によって伝えられたその思いものせて、直接心を通わせられる唯一無二がやきものの有難さであろう。

そして、もう一つ、私の楽しみは宝さがしである。

リサイクルショップで、ガラスケースではなく、雑多に置かれている中からそれを見つけ出すのが面白い。多くの中からこの小皿一枚を目にしたとき、またワクワクしてくるのだ。無論、高額査定がつく宝ではないのだが、表に蕪村の句「筏士の蓑やあらしの花衣」、裏に華鳳写とある。高台に



蕪村の句が描かれた小皿

「道八」と印があり、道八なら間違いは無いなと即購入。ちなみに値段は100円であった。ネットで華鳳を調べると、中島華鳳とあり、円山派の画家で慶応2年京都生まれ。森寛斎に学び、書は富岡鉄斎に学ぶとある。

今まで知らなかった画家を知り、蕪村の「筏士自画賛」と「筏士画賛」を知った。他のお作品にも千代女の句「竹の子やその日のうちに独り立」を知り、俳句の面白さも加味されて、どんどん調べるうちに、どんどん楽しくなってくる。

興味あるものが多すぎて、まとまりがつかない状態なのだが、それでもなんとなく一つに繋がっているような思いも感じるこの頃であり、アマチュアといえども、どれだけのことが出来るのか、色々な経験や出会いを糧として、土と楽しみながら挑戦をしてゆきたい。

私の作品自慢

大物作り

会員 稲垣 薫

陶芸を始めて30年近くなりますが、ずっと大きなものを作ることに興味が持てずにいました。それよりもオブジェや思い浮かぶ面白い形を追求してきました。



現代版ひな人形



右の「ダンス」は、“かさま”アマチュア陶芸大賞で“かさま”ふるさと賞をいただきました。好きなコンクールだったのになくなってしまっって残念です。

でも、ふっと年齢的に大物を作るのに、今を逃すと一生作れないだろうなあ……と思ってしまうと、別に仕事でもないし、頼まれたわけでもないの、挑戦する必要はないのですが、曲がりなりにも 30 年近く陶芸に携わってきて、一度もその苦労も面白さも知らずに終わるのは淋しいなあ…… と思い立ち、大物作りを始めました。

まず、大物第一作は焼き上がりが直径 38 cm、高さ 14 cm で、白化粧とイッチンで装飾、釉薬は青磁でした。



舞う華

これはちょっとインパクトに欠けるなあ、と次は瑠璃釉で作ってみようと思い、イッチンという技法が好きなので、瑠璃釉とイッチンを組み合わせでデザインを考えて、直径 29 cm、高さ 12 cm で試しをしてみました。



模様を内側にも外側にも入れました。

これはあまりにもごちゃごちゃしてすっきりしないので、デザインをもっとシンプルにして作ってみました。そして、出来上がったのが、今回の作品展で会長賞をいただくことになった「夜のはじまり」(注*)です。大きさは、直径 37 cm、高さ 12 cm に仕上がりました。

この焼き上がりは自分でも満足しましたが、サイズのまだ小さいなあと思い、市川先生から「大きなものをろくろでひくときには、軍手を使うといい」とアドバイスをいただいたし、このデザインでもっと大きなものを作ってみようと、赤土 7 kg で挑戦してみました。これがとても調子がよく出来上がり、生で直径 52 cm、高さ 17 cm、焼き上がりが直径 46 cm、高さ 15 cm と、私の作品で最大の物ができ、デザインもうまく入ったなあ と焼き上がりを楽しみにしていました。しかし、焼き上がった作品には底の中央にシミが浮き出ており、がっかりしました。



赤土 7 kg で挑戦した作品



出来は良かったのですが、底の中央にシミがあります。

これがケチのつきはじめでした。この時には、「まあ、そんなに調子よくいくもんじゃないよなあ。つぎ頑張ろう！」と、まだ元気があったので、デザインも新しく考え、粘土も 9kg に増やして、心機一転作り始めましたが、まず底の厚みを測り間違えて、乾燥時に底に切れが入り、次は削りに苦労して疲れ果ててぼんやりしていて、やっとこれでいいだろうと、ろくろを停止させるのにレバーを逆に押ししまい、停止するどころか急回転して、さすがの重い鉢も飛んでしまいました。これにはいったい自分は今何をしたのか、茫然自失とはこのことか！と涙も出ませんでした。これ以後ろくろを止めるときにすぐ手が出なくなりました。

そして今度こそと出来上がった作品の焼き上がりが、線は全く出てないし、今までに瑠璃釉でこんなひどい状態に焼きあがったことがない、同じ釉薬とは思えないボテっとした焼き上がりに、あまりメンタルの強くない私はすっかりやる気をなくしてしまいました。



これは直径 10 cm と 11 cm ですが、次はもっと小さく 6~7 cm で、香合と言えるものを作りたいなあと思っています。

大きなものは私には合わないんだと思い、次は合子をろくろでフタと身がぴったり合うのに熱中し、今度はどんどん小さなものへと気持ちが向いていきました。

このような中で倶楽部の作品展が始まり、しかも、すでに出品していた先ほどの作品「夜のはじまり」(注*) に会長賞が与えられたのです。

ちょうど作品展会場と同じ“みやこめっせ”で読売書道展が開催されていて、書道をしている知り合いが何人か見に来てくれて、次々とラインでお褒めの言葉をいただきました。なんだかみんなから、「へこんでないで、頑張れ！」と背中を押されたような気がしました。

ガククリ来たボテっと焼きあがった作品のデザインも再考の必要があるし、また心機一転頑張ろうと思えました。ありがとうございました。



副賞で頂いた寺池先生のお茶碗でお茶をたててちょっと一息です。

編者注*) 受賞作品「夜のはじまり」の写真は、年末に発行される第 7 回作品展図録に掲載されます。

陶芸技術 / ート

テーブルコーディネートと 京都のうつわ

おきにのうつわ
食空間コーディネーター/工芸品ディレクター

湯浅 靖代

私がテーブルコーディネートと出会ったのは、今から四半世紀近く前のこと。まだ、その言葉自体も世間に浸透していない頃、ある懸賞雑誌に載っていたテーブルコーディネートコンテスト募集記事を見たのが最初でした。元々、料理好き、もてなし好きの母の影響を受け、うつわには興味を持っており、またちょうどその頃、ウェディング業界で働き始めたこともあり、一気にコーディネートの世界に引き込まれるも、その全容はわからないまま手探りでコーディネートして応募した思い出があります。

このコンテスト応募をきっかけに（ビギナーズラックか一次審査には通りました）、食器店を巡ったり、資格を取ったり、独学でコーディネートの勉強を始め、当時は会社員でしたので休日を利用してコンテストへ出品したりと、その当時は二足のわらじを履く生活をしていました。

その当時使っていた食器と言えば、洋食器。国内メーカーの産地を巡っては、資金が許される限り買い集めたり、時には海外メーカーに憧れ、眺めてみたり…。そんな洋食器中心の考え方でしたが、職場を専門式場からホテルへ変えた頃に出品したテーブルコーディネートコンテスト（ナゴヤドーム・ドームやきものワールド）で、光栄なことに最高賞の金賞を受賞した頃から、徐々に考えが変わり「京都」を意識することになりました。

転職先のホテルは小さなホテルにもかかわらず当時の料理長の意向で京都のうつわを多く使っていて、夏は団扇型、秋はふくら雀など、その意匠の素晴らしさと、季節ごとにうつわが入れ替えられるという様子に非常に感動し、京都を意識した考えに至るのに大いに影響がありました。



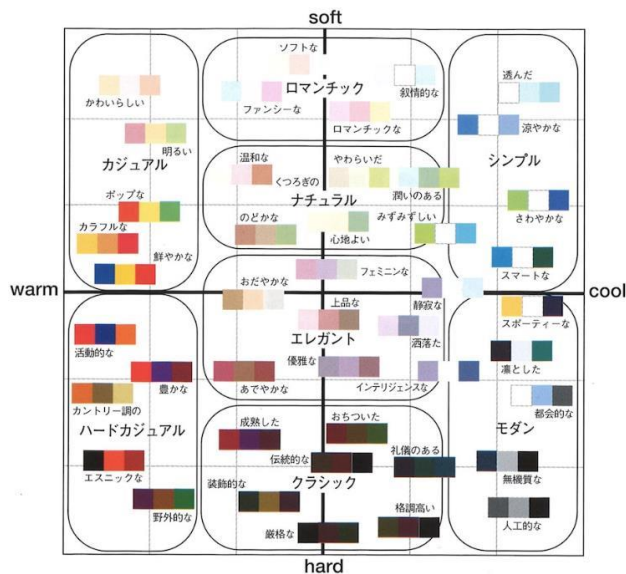
京の新年 ～和・輪・話と共に～
ドームやきものワールド
第1回テーブルコーディネートコンテスト
金賞受賞

受賞と同時に、それまでしていた独学のスタイルにも限界を感じ、いずれ起業したいとの思いもあり、神戸の食空間プロデューサー丸山洋子先生の門を叩きました。陶磁器や漆器の産地プロデューサーをされていた先生の活動に刺激を受け、京都のやきもの京焼・清水焼の産地支援になるようなテーブルコーディネーターを目指し、起業しました。

はじめは闇雲にテーブルコーディネートを売り込んで空回りしていた苦い思い出もありますが、おかげさまで徐々に京都の陶磁器商店や窯元さんとのご縁ができ、展覧会や見本市でのコーディネート、百貨店の食器売場のディスプレイなどを生業とさせていただいています。気がつけば結婚した相手も京都の陶磁器卸売に代々携わる方で、今では夫とのユニット「おきにのうつわ」を結成して、京都のやきものの魅力を SNS で発信したり、セミナーを開催して技法の色々をお伝えしたり、うつわの扱い方をレクチャーする活動をしています。

取材を受けた際、なぜか「京都のうつわでコーディネートをやる魅力は？」と必ず聞かれます。その時、返すのは「京都は多彩な技法の集まった地。これほどコーディネートするのが楽しい産地はない」と自信を持って答えています。私たちテーブルコーディネーターが必ず使う手法で「感性イメージスケール」（感性の“ものさし”）というものがあるのですが、そのイメージごとに表現できる うつわが京都には揃っていて、様々なテーブル

ルコーディネートを提案できるのが京都のやきものの魅力です。



感性イメージスケール。

テーブルコーディネートと聞かれると、非日常の空間で綺麗に豪華に飾られたものをイメージされるかもしれませんが、そのようなきらびやかなものがそうではなく、家庭で出来るものが本来の姿だと思います。もちろん、毎日毎食コーディネートをするのをおすすめしているわけではありません。無理なく、時間が許されるときや特別なハレの日、お客様のおもてなしの心を表現する手段として楽しんでいただきたいと思います。

食空間での主役は「人」。コーディネートされたうつわや料理、お花はその場を盛り上げる脇役と考えます。もちろん、ご自身が作られたうつわに盛り付けられたお料理の味は格別なものでしょう。演者の一つとしてその場を盛り上げる役目を担っていると思います。

コーディネートの別の役目として、生産者と消費者をつなげる販売促進の場にも登場します。ある京都の百貨店の食器売場をディスプレイさせていただいて久しく、京都のうつわだけでなく全国の陶磁器や工芸品に触れさせていただいています。よい商品をさらに魅力的に見せる＝お客様に使っているシーンを想起させることを根底にして、コーディネートしています。食器であればお盆やお

箸、季節のお花などで装飾し、食事のシーンを再現し、花器や香炉などでしたら床の間に飾っているような演出を心がけています。赤やオレンジなどをアクセントに持ってくるとお客様の目にも留まりやすく、足を止めていただくことが購入への第一歩目となります。これは私がよく使う技です。



百貨店での商品ディスプレイ

食空間コーディネーターとなって 10 年を迎えようとしています。今では、京都のやきものだけでなく京都の工芸品や食品の PR も手がけるようになってきました。昨今、ものづくりに関するテレビ番組や書籍、雑誌などをよく見かけます。大量生産、大量消費の時代から手仕事にシフトチェンジしていく時代へと変わりつつあるのを感じています。そこで、思うのはやはり主役は「人」。コーディネートとは調和させ、全体をまとめること。生み出されたうつわと人を調和させてくれるコーディネートを皆さまお楽しみください。

展覧会見聞録

ボストンで感じた事

陶藝家 今井 眞正

今年は、京都市とボストン市が姉妹都市の提携を結んで 60 周年になります。私が所属する工芸京都ではこの機会にボストンでの展覧会を開催し、日本の工芸美術を紹介するべく、2 年程前から準備を進めてきました。4 月には、公式訪問団といたしまして、門川京都市長とともにボストンを訪問し、また 9 月には展覧会の開催のために渡米するというスケジュールで 1 年に 2 回もボストンに訪問したことになります。

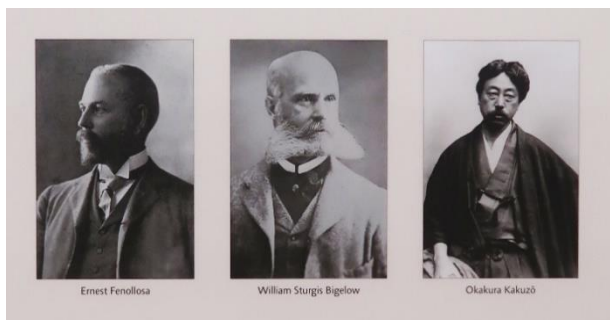


4 月に公式訪問したときの写真
門川市長と子供博物館を訪問。ここには京都の町屋を移築した“京町家”があり、町屋で子供たちが遊べるようになっている。

今回は、そのボストンの様子をお伝えしたいと思います。ボストンはアメリカでも大変古い町で、今でも建国当時の様子が随所に残っている美しい町です。また大学とアメリカ屈指の学術研究の街として知られています。ご存知のハーバード大学や MIT (マサチューセッツ工科大学) 等世界でも指折りの大学があり、メディアラボ等では先端技術の研究がされています。

ボストンと日本の繋がりには明治時代にさかのぼります。明治初めに動物学者のエドワード・モー

スが、貝類研究のために、日本に訪れました。そして皆さんご存知の大森貝塚を発見し、東京大学の教授となりました。日本の考古学の先駆けとなったと同時に、もともとモースはやきものが好きで、日本でも様々なやきものを集めたそうです。そして学術的な見地から発表した論文に「cord marked pottery」という言葉が記述されました。これが後に縄文式土器と訳されたということです。



左からフェノロサ、ビゲロ、岡倉天心

当時のドルは、今では想像する以上に強大な力があり、モースは 5000 点の陶器を収集し、後にボストン美術館に売却し、これがボストン美術館のコレクションの一翼を担っております。また、モースの話を聞きつけ、日本美術の研究に取り組んだのが医師でもあったウィリアム・スタージス・ビゲロという人です。この人は、浮世絵等版画や絵画を中心にコレクションを重ね、版画約 30 万点等をボストン美術館に寄贈したか、売却したのかは、定かではないですが、この人のコレクションもボストン美術館のコレクションの大切な部分を占めているそうです。



明治中期に活躍した望月玉泉による「桜の図」

私たちも、同行した漆芸家の望月玉船先生の曾々祖父にあたる望月玉泉さんの絵画作品が7点程ボストン美術館にあると言うことで、特別にお願いして収蔵庫に入れていただき、その作品を拝見することができました。もともと望月家は絵師の家柄で玉泉さんのさらに父上の作品も拝見することができました。これもやはり目録を見ると、モースのコレクション1点とビゲロのコレクションが4点ということでした。

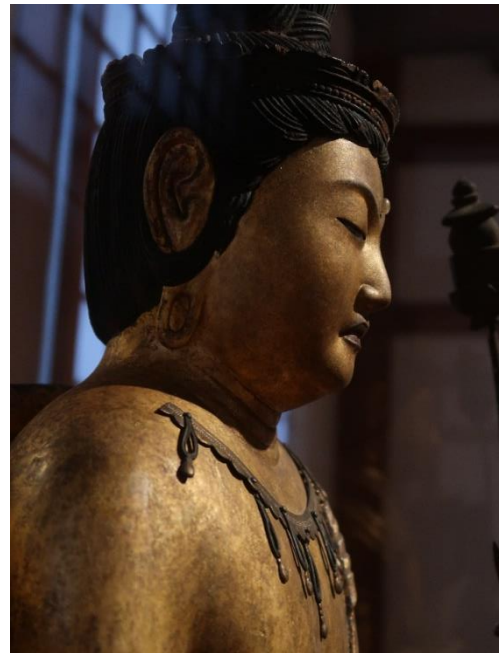


東洲斎写楽の原画、極細の筆で非常に繊細に描かれています。独特のデフォルメは、他にはない躍動感がある。

これらの作品と同時に、浮世絵のコレクションも拝見することができました。浮世絵は春画等も含めて、膨大なコレクションで私たちが見せていただいたものは、退色を防ぐ目的で一切公開せずに収蔵庫にしまっておくものも含まれていました。通常、浮世絵は茶色くなったものが多く、白い紙に刷られた時のものに近い状態のものはその絵の具の色も含め新鮮な感動を覚えました。中でも珍しかったのが東洲斎写楽の作品で、実物を拝見する機会も少なく貴重な体験となりました。その作品とともに私は初めて見ることができたのが、直接絵筆によって描かれた原画です。細い線で描かれた非常に精緻なもので、デフォルメされた線は迷うことなく細い筆先で表現され、思い切りのよさと構成力にはびっくりいたしました。

これらのコレクションと同時に、ビゲロが傾倒した仏教美術のコレクションも素晴らしいものがありました。快慶のものや日本にあったらきっと重要文化財や国宝に指定されるのではないかとと思われる作品が数多くありました。おそらく収蔵庫にはもっともっとすごいものが眠っているに違い

ないと思いました。私が気に入ったのは、聖徳太子像でこれにはしばらく見入ってしまいました。



鎌倉時代の代表的な仏師、快慶の作、その作の中でも秀作だと思います。彩色など保存状態も非常にいい。

モースとビゲロの名前をだしたのもう1人どうしても名前をあげないといけない方がおります。アーネスト・フェノロサという人で、この人もボストン郊外のセーラムという町で生まれ、モースやビゲロと同じくハーバード大学を卒業した後、日本で活躍することとなります。来日後は、日本美術にどんどん傾倒し、生徒とも言える岡倉天心とともに日本美術の調査や文化財の調査、保護に尽力するわけですが、フェノロサと岡倉天心は日本に近代美術の教育機関を作ろうと奔走し、後に東京藝術大学を創設することになります。

近代日本の美術の歴史は、良くも悪くもこのような人たちが礎を作り、成長してきたこととなります。さらに、ボストンはこのような人材を輩出するとともに、今もなお、新しい時代を切り拓く頭脳が集まる街として世界でも重要な役割を果たしています。

さて、私たちの展覧会は、ボストンのウォーターフロント地区ともいえる Seaport にある The Society of Arts + Crafts のギャラリーで行われております。この組織（ボストン美術工芸協会とて

も訳せば良いでしょうか) は 1897 年に設立され、美術の普及と発展に関わってきた組織で、やはりアメリカの常で、寄付によって成り立っています。設立されたのは、上記に挙げた人たちが活躍していた時代と一致します。日本が近代国家へ生まれ変わろうとしていたときに、アメリカではこのような組織ができていたとしますと、国民一人一人が美術を大切にする文化的余裕があったのはうらやましくも思います。

この展覧会の名称として、**Contemporary Innovators in Japanese Arts and Crafts** というものがつけられました。伝統工芸ではない、新しい工芸のあり方を追及しようとしている私たちにとっては、良い名称を考えてくれたと感謝しております。



展覧会の広報イメージに私の作品が使われていました。

日本から渡米した 10 数名程で、今回は展示作業をすることになりました。ほぼ 1 日かけてあれやこれやと意見を交わしあい陳列作業をしたのですが、どうもしっくり来ません。続きは明日しよ



SAC・GALLERY での展覧会の様子。
全体的にポップな印象です

うということになって会場をあとにしたのですが、現地の展示責任のキュレーターの SAM という青年が 1 人で夜を徹して展示作業を行い、自らが考えるベストな展示方法にすべて並べ替えられていました。現地の展示什器はどれも寸法が高く、箱状のものは私たちの胸近くまであるようなもので、文化の違いと体の大きさの違いを改めて感じさせられました。ともすれば畳の上に何の台もおかず展示し、座って拝見したりする日本的発想は、生活様式からもあり得ないことだと改めて思い知った経験でした。

「郷に入れば郷に従え」の言葉通り、すっきりとポップな雰囲気仕上げられていたことは大変勉強になりました。



関税の問題では苦労しました。その関係から販売はできない。美術品の輸出にはまだまだ課題が山積です。

オープニングパーティーでは、入りきらないぐらいの人々が参加くださり、華々しく開会することができました。来場者の皆様も興味深く、ビューティフルとか、ワンダフルとか、アメージングとか言いながら感嘆してくれる方が多く、苦勞してこの展覧会を実現させた甲斐があったと本当にうれしく思いました。会期は11月10日までなのでより多くの方々に観ていただけるのではないかと期待しています。



またいろんな方々と親交ができた。作品を通じて世界の人々と巡り会えることは私たちの特権かもしれない。

ハーバード大学にはアートオフィスなる機関があつてその附属施設として、セラミックプログラムという綺麗で大きな陶芸のスタジオがあります。陶芸家の参加者4人でデモンストレーションをしてきましたが、その様子はまたの機会にお伝えすることにしましょう。また、ニューヨークの話も「つづく……」ということで、機会をいただいた時にお伝えしたいと思います。

活動報告

第7回京都・やきもの倶楽部作品展 開催

令和1年9月13日～9月17日の期間、恒例の作品展を開催した。これまでは、10月の終わりから11月の初めにかけて開催していたものを、会場「みやこめっせ」の予約が抽選となったこともあつて、今回は1カ月半ほど前倒しとなった。また、開催期間の曜日も変わることになったので、例年開催最後の日に講評会・講演会・授賞式・懇親会を行っていたのを変えることについて、出品者の皆様からご意見を頂き、その結果、最終日前日に行うことになった。このことは宅配便による搬出が少し増えた程度で、混乱はなかった。作品展期間中の入場者は昨年より少し増えて210名であつた。

作品展には会員17名、賛助出品者7名の参加があり、出品総数は40点であつた。昨年と比べて5点減っており、ここ2年ほどは出展者数、出品数ともに減少しており、来年度の皆様方の奮起を期待したい。

会期前日は、作品の搬入と図録写真の撮影、会場設営が行われた後、寺池尚孝会長(審査委員長)、市川博一理事、森田隆司理事、吉村樂入理事による作品審査が行われ、以下の作品に各賞が与えられた。

会長賞	稲垣薫	「夜のはじまり」
副会長賞	的野寿代	「紫陽花 香炉」
	宮崎薫	「トライアングルの共鳴」
吉村賞	曾根恭子	「桔梗」
奨励賞	安部邦子	「こっちだよ！」
	中山愛子	「ヤモリの独り言」
清水焼の郷賞		
	平須賀三郎	「春の宵」
	増田淳三	「悠久の譜」

会期4日目の9月16日には、先の4名の審査員の先生方に加えて、今井眞正副会長にもご出席いただき、その場に参加していた全員の作品に対する講評が行われた。まずは作者の側からはその作品の制作意図や作品に対する思いが語られ、そ

れに対して各審査員からその作品への率直な意見が述べられた。受賞作品に関しては、寺池審査委員長による講評のまとめが、この後発行される作品展図録に掲載される。



会場に並べられた作品。全体に大きな作品が少なくなり、小さなものが増えたように思える。

講演会・表彰式・懇親会の開催

講評会終了後、四条烏丸近くにある BAR CHART に場所を移して講演会・表彰式・懇親会を開催した。

講演会では、「京都の近代陶芸 一家族の視点から」と題して市川博一氏、今井眞正氏、寺池尚孝氏による共同講演が行われた。配布された資料によると、戦後の工芸団体は四耕会、走泥社に始まって清水六兵衛の京都陶芸倶楽部、楠部弥次の青陶会に繋がって行く。この青陶会の会員であったのが、今回の講師御三人の父上、市川廣三氏、今井政之氏、寺池静人氏である。

この後、工芸全般の分野を含む会が作られて行き、日本工芸会、現代工芸美術家協会、日本新工芸家連盟、工芸美術創工会、工芸美術日工会が現在も存続している。以上が講演の要約である。

これらの会には複数で所属されている方々が居られるようで、筆者は、それぞれの会の内容について興味があったので、その特徴を WEB で調べてみたが、結局、よく分らなかった。

表彰式では出席された受賞者全員に表彰状が授与され、会長賞には寺池会長からトロフィーと副賞、副会長賞には今井副会長から副賞が手渡された。また、吉村賞には、遅れて参加された吉村理事から副賞が手渡された。

食事をしながらの懇親会はいつもの賑やかな雰囲気の中で無事終了した。

今回の会場は、カウンターを主体としたバーで、照明も薄暗く、講演会、表彰式には適していなかったが、講演会に続いて飲食できる会場がなかなか見つからないという事情があり、やむを得なかった。次回はもう少し検討する必要がある。

会員便り

個展・グループ展・企画展・公募展 (令和1年5月～令和1年10月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるってお申し込み下さい。用紙は、すでに配布しております「展覧会情報」掲載申込書の最新版(2017/11 発行)をご利用下さい。

令和1年

■ 5月8日～5月13日

第48回 日本伝統工芸近畿展(大阪展)

大阪高島屋 7階 グランドホール(大阪市)
吉田 貢(入選)

■ 5月22日～5月27日

第48回 日本伝統工芸近畿展(京都展)

京都高島屋 7階 グランドホール(京都市)
吉田 貢(入選)

■ 5月29日～6月4日

一かぶく土象— 陶・今井眞正展(東京展)

高島屋日本橋店 6階 美術画廊
(東京都中央区)

今井 眞正

■ 6月4日～6月9日

2019年 第58回 日本現代工芸美術展

京都市美術館 別館(京都市)
森田 隆司

- 6月4日 ～ 6月9日
第68回 象（かたち） 同人会
 京都府立文化芸術会館 1 F（京都市）
 森田 隆司
- 6月13日 ～ 6月23日
現代工芸美術家協会有志による
それぞれの象展
 武家屋敷 赤井家住宅（三重県 伊賀市）
 森田 隆司
- 6月20日 ～ 6月24日
KIRIE ZOGAN
 ギャラリー 象鯨（京都市）
 宮崎 正制
- 6月26日 ～ 7月2日
一かぶく土象— 陶・今井眞正展（大阪展）
 高島屋大阪店 6階 美術画廊（大阪市）
 今井 眞正
- 7月21日 ～ 7月25日
日光東照宮 美術展覧会 「黎明」
 日光東照宮客殿 東西回廊（栃木市）
 宮崎 正制
- 11月1日 ～ 11月24日
改組 新 第6回 日展
 国立新美術館（東京都 港区）
 市川博一、加藤 丈尋（特選）、谷口 正典、
 谷口良孝、森田 隆司、和田 真理子
- 12月14日 ～ 1月11日
改組 新 第6回 日展 京都展
 京都市美術館別館
 京都市勧業館「みやこめっせ」
 （京都市 左京区 岡崎）
 市川博一、加藤 丈尋（特選）、谷口 正典、
 谷口良孝、森田 隆司

凡例

- 開催期間
- 展覧会名
- 展覧会場（開催地）
- 出品者名（入選、入賞）

編集後記

先日、京都・やきもの倶楽部の会計幹事としてホームページのレンタルサーバドメイン使用料 2,436 円を払い込みました。この他にサービス利用料 5,574 円が必要ですが、こちらはまだ請求書が届いていません。年間合計 8,010 円であり、世界中に発信できることを思えば安いものです。ホームページを開設したのが平成 29 年の今頃ですから丸 2 年が経過し、3 年目に入ろうとしています。最初に作って、アップした直後には、グーグルで検索すると、最初から数件目に「やきもの倶楽部」が出てきて、それから数日後にはトップになっていました。さらに時間が経つと、トップページだけでなく、中身のサイトも紹介されるようになってきました。その状況を見ては喜んでいました。それからは、ことあるごとに更新を重ねてきたのですが、現在でも最初には出ていますが、次第に関連する他のサイトが多くなってきたような気がしています。自分自身でもマンネリ化が気になっています。実際、世間では、堅苦しいホームページよりもブログのように気軽に読めた方が人気があるようです。携帯を持たない私にはとても無理かなと思っています。

何といっても、ホームページは見てもらえなければ何の価値もありませんので、せめて会員の方だけでも結構ですので、年に 1～2 回はご覧いただき、意見をお寄せください。特に、ホームページ中の「会員紹介」のページには、皆様方専用の欄を作っていますので、是非とも一筆お願いします。全会員の思いが籠ったサイトにできれば願っています。

最後に、スマホをお持ちの方々のために QR コードを作りましたので、是非とも今すぐクリックしてみてください。



検索： 京都・やきもの倶楽部

（編集委員 片岡俊彦）

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)